

桜蔭俳話会五月句会 (第三二五回)

平成二十六年五月二十五日(日)

鎌倉東慶寺・浄智寺 吟行

咲き競う花やさながら夏サラダ

才美

草木が一斉に花を咲かせている境内の谷の光景は、あたかも夏サラダを見ているようである、との句意である。吟行に同行しその光景に出会い、ともに花の香りの真只中にいた者は作者の見立てに共感する。最高得点の評価を得た理由であろう。

ここで問題となるのは、「夏サラダ」の季語性である。近時の料理雑誌やウェブサイト上では、夏サラダの言葉は既に散見されるが、標準的な日本語辞書として多用されている広辞苑にはまだ採録されておらず、角川出版等の歳時記にもまだ採録されていない。

名詞の前に春夏秋冬の季節をあらわす語を置いて、季語であるとするのは良くないとされるが、これはあくまでも原則である。「万緑」の例もあるように多くの読み手が首肯する内容の提示であれば、独立季語としての賞賛と賛同を受ける。

この観点から言えば、掲句では、上五から中七にかけての「咲き競う花や」のフレーズは「花サラダ」の内容を「説明する」ような語句であり、また、その語句に続く「さながら」のフレーズは、「さながら・・・のよう」の用法に示されているように、「如し」という見立てを述べたものである。

一般に「説明」の俳句や「如く」の俳句は良い評価を受けない。しかし、作者のこれまでに示された力量を考えると、「夏サラダ」を季語として定着させるような秀句が、早晚生まれるものと思う。

木下闇無縁仏の竹の筒

ツル子

花も線香も供えられていない竹筒を無縁塚の前に見ている。作者は木下闇、無縁仏、竹の筒という名詞を並べているだけであり、作者の感慨を表す言葉は全く使用していない。読み手の鑑賞に全て託しているのである。その仏は、無縁塚に入れられる前は立派な個人墓または家族墓に葬られていたに違いない。月命日や年二回の彼岸には多くの家族や一族の者が訪れていたのである。それが時の流れによって墓参に訪れる者が絶え、ついに墓は寺によって取り払われ、遺骨は無縁墓に合葬されてしまった。

この無縁墓の竹筒は空っぽだったのである。事実のみを提示し、自分の見立てを読み手に誘導しない点において、俳句作りの王道を行った秀句である。

すり減りし石の階段楠若葉

ヤエ子

すり減った階段は、古い社寺仏閣を吟行コースに入れると、必ず出てくるフレーズである。しかしこの句が平凡に墮していないのは、下五に楠若葉を据えたことである。これによって句の重心が定まり、どっしりとした句になっている。正に俳句は季語勝負である。楠若葉を例えば若葉光といった季語に置き換えて見れば理解できよう。

茅葺の門の向こうの新樹かな

ヤエ子

当日の吟行句として評価される句である。茅葺と新樹の対比(古いと新しいの対比、暗いと明るい)の対比。こ

のように俳句は対比を持ち込むと、メリハリのついた印象深い句となる。

禅寺の奥へ奥へと苔の花

守

吟行句は、ともすればその地の寺社や固有名詞を読み込もうとするが、安易な寺社名の表記は、観光葉書俳句にする恐れがある。

吟行はあくまでも句材を拾うだけであり、句材に基づいて作者の想念をジャンプさせて作句するものである。吟行に参加しなかった者にも鑑賞の幅を広く与えるのが望ましい。

禅寺である浄智寺の境内墓域は、ゆるやかな谷合にあり、苔むす道が奥へ奥へと続いていた。

木下闇ほていの福耳光りけり

弘子

布袋様と言えば福々しい容貌の禅僧であるから、その耳朵をわざわざ福耳と言うことはない。換言すれば、布袋の耳と言えば、福耳は既にその中に含まれているのである。句立てから言っても、丁寧に「ほていの福耳」と表記して、中人にせず、「ほていの耳の」として、中七の定型に収めた方が良い。

鳴きとほす夏うぐいすや高野槇

守

相変わらず鎌倉の町は車で溢れ、静かな町並とは言えなかったが、山門を越え寺の境内に一步入ると、夏うぐいすの鳴き声に溢れていた。久し振りに老鶯を満喫した。浄智寺の境内には高野槇の古木が聳えており、夏うぐいすの澄んだ鳴き声は高野槇の天辺から降るように我々を何時迄も包み込んだ。

蝸牛許可なく入りし庫裡の土間

明美

寺は境内や墓域の散策は自由であり、各堂内への立ち入りも原則として自由であるが、私的空間である庫裏は許可なく立ち入ることはできない。このようなルールは人間界だけのことであり、蝸牛など小動物の世界には勿論適用されない。

作者は蝸牛を擬人化し、許可を得ないで庫裏に立ち入ったと断罪している。このような擬人化の俳句は人間と小動物との間の落差をクローズアップして面白い世界を提示することができるが、この面白さは浅くて一過性に終わることが多い。擬人化表現は多用すると、読み手に持続性のある深い感動を与える本格俳句への道を狭めることになりかねない。

改札を出れば眼前夏木立

邦子

眼前直覚を唱導する俳論がある。この俳句は眼前直覚論そのものに従った句であろうか。駅の改札口は結界として存在しており、この改札口を抜け出すことによって、人工物の世界から自然の世界にこれから踏み入るのだという、作者の高揚感が現れている。

大屋根に浮く緑青や夏木立

幸

当日の吟行句として良くまとめられている。神社仏閣を組み込んだ吟行句会では大屋根の句はよく出されるが、この句は緑青が浮いていると表現することによって成立している。

一隅を照らす十葉東慶寺

友子

当日の吟行句として良く配慮された句である。東慶寺という固有名詞が効いている。駆け込み寺であった東慶寺の存在意義が、「一隅を照らす十葉」と良く響き合っている。

外つ国の人の会釈や寺若葉

弘子

国籍を問わず、初夏の鎌倉の一日を楽しんでいる様子が、「会釈」に表されている。おそらく作者は会釈を返したのである。

白壁に老鶯の声写りをり

ツル子

芭蕉は「岩にしみ入る蟬の声」としたが、この句における、白壁に鳴き声が写るとの把握は斬新である。当日の老鶯の鳴き方は、このような大胆な形容を許してしまうほどであった。

岩煙草もうすぐ入る墓めぐり

眞壽

「もうすぐ入る」のフレーズが墓に直結して読まれる可能性を排除するために、「墓巡り一步手前の岩煙草」とすることもできる。

杉戸の門一枚板や先代萩

幸

杉の板戸に着目したのは、作者の吟行の眼が鍛錬されていることの証左である。古い門に敬意を表して、先代萩を千代萩に言い換える。そして、六音の千代萩を上五に置いて、「千代萩一枚板の杉戸門」とすることもできる。

仏の堂へ吹き込む若葉風

友子

当日の吟行句として良く観察された句である。風は吹くものであるから、「吹き込む」は省略することができる。どういう態様で風が吹き込んでいるのかを言った方が良い。例えば、「三世仏の堂へゆるやか若葉風」とすることもできる。

夏木立影オアシスは他人がおり

眞壽

夏木立影オアシスは緑陰のオアシスと言い換えることができる。吟行の途中、腰掛ける場所をみつけたが、既によその人が座っていたのは残念、という句であろう。とすれば、「緑陰のオアシスの椅子塞がれし」とすることもできる。

緑陰や軋み大きく井戸ポンプ

友子

単に井戸ポンプと言うと電動式の井戸ポンプも含まれてしまう。「軋み大きく」のフレーズを活かすのであれ

ば、手漕ぎ井戸の表現の方が良い。

青葉山遠き流れの甘露の井

ツル子

井戸から汲み上げた水が流れ去って行くのを見て、鎌倉の歴史に思いを馳せ、水の流れと歴史の時間の流れとの合一性を考えたのであろうか。とすれば、「遠き流れの」を「遠き流れへ」とすることもできる。

筆塚に前田青邨夏木立

直子

当日の吟行句として成立する。多くの文人墨客の墓の中から日本画家の前田青邨を選択したのは、素晴らしい夏景色に誘発されたのであろうか。

万緑を割るや布袋の一步前

才美

正規の吟行経路をショートカットして切株に休んでいた評者には、布袋様の具体的な姿態は不明である。作者の説明を聞けば、「万緑へ一步踏み出し布袋尊」、とすることもできる。

(不在投句 古野明美)

### 「事務局からお知らせ」

○六月句会

・六月二十一日(土) 午後一時

・場所 旭区民文化センター・サンハート

(相鉄線二俣川駅ライフ五階)